

## 〈研究ノート〉

「メキシコなるもの」の創出  
—マヌエル・ガミオの人類学をめぐって—

青木利夫（一橋大学大学院）

## はじめに

メキシコ人類学の父、インディヘニスモの祖といわれるマヌエル・ガミオ（Manuel Gamio 1883-1960）は<sup>1)</sup>、テオティワカンの発掘をはじめとする考古学研究でも知られている。彼は、人類学によってインディオ<sup>2)</sup>の「現在」を、そして、考古学によって彼らの「過去」を研究することで、インディオを含めたメキシコ全体の発展を考える。最終的に彼がいきつくところは、インディオへの回帰ではなく白人とインディオの「融合」、「混血」であるが、ガミオがインディオの「過去」を掘り起こし、それを「現在」とつなげることによって、それをメキシコのアイデンティティのよりどころのひとつとしたことは注目すべき点である。

周知のとおり、ガミオが活躍した20世紀前半は、ラテンアメリカのアイデンティティをめぐってさまざまな議論がラテンアメリカの知識人によってなされた時代であった。メキシコ国内では、インディオの生活をモチーフとして描かれた壁画に代表されるように、メキシコの「国民文化」にインディオが積極的に取り入れられるようになる。ガミオもまた、メキシコのナショナリズムを論じるなかで、インディオに注目し、そしてそれまで白人社会にはあまり知られていなかった彼らを調査すべきことを主張する。その調査は、現在を生きるインディオだけではなく、コロンブスの「新大

陸発見」以前の「文明」にまでさかのぼっておこなわれる。ガミオのテオティワカンの発掘とその修復は、かつて「偉大な文明」を築いたインディオがメキシコの基盤をなすひとつの要素であることを国の内外に広く示すものとなったに違いない。こうして、土の中から掘り起こされたインディオは、「メキシコ」という「想像の共同体」<sup>3)</sup>の構築に重要な役割を担うこととなった。

こうしたインディオの研究やそれにもとづく政策、あるいはその根底に流れる思想は、メキシコの支配層が「死せるインディオ」を利用しつつ、自己の文化的、社会的、政治的な正統性をつくりあげるものにすぎないという批判もあるだろう<sup>4)</sup>。確かに、抑圧されているインディオの側に立とうとするガミオにたいしても、彼が国民統合をめざす際にインディオをどのようにとらえていたのかをみれば明らかなように、上のような批判もありえよう。彼の研究やそれにもとづく政策が、このような政治性、イデオロギー性をはらむものであればなおさらのこと、ガミオの思想がどのようなものであったのかをあらためて検討することには大きな意義があるのではないか。本論では、ガミオの意図がどうあれ、彼の思想にはらまれているこうした問題を明らかにしたい。

また、ガミオと同時代人であるホセ・バスコンセロス (José Vasconcelos 1882-1959) の『ラサ・コスミカ (La raza cósmica 宇宙の人種または普遍的人種)』をはじめとして「メキシコの国民文化＝混血文化」という言説がつくられていく時代にあって、ガミオの思想がそれに大きな影響を与えたであろうことは想像に難くない。そして、こうした言説が、われわれの「メキシコ文化」にたいする理解をある程度規定してきたことは否定できない<sup>5)</sup>。そうであるならば、時としてインディオにたいする偏見ともみえるガミオの思想を検討することは、われわれの「メキシコ文化」の理解のあり方をも問い直すきっかけとなるのではないか<sup>6)</sup>。

小論では、こうした問題意識にもとづき、ガミオの代表的著作のひとつ『祖国をつくる (*Forjando patria*)』を中心に検討し、ガミオがインディオ

をどのようにとらえ、そして、「国民文化」のなかでそれをどのように位置づけたのかを検討したい。

## 1. インディオの発見

スペイン系の血を引くガミオがインディオに関心をもったのは、プエブラ州、オアハカ州と境を接するベラクルス州の州境に父親が所有する農場で働いていた労働者たちと出会ってからである。ガミオの兄弟がメキシコ・シティに戻ったにもかかわらず、その農場にとどまったガミオの気持ちを、彼の孫アンヘレス・ゴンサーレス・ガミオは、「(…) 彼が発見しつつあったその別のメキシコに魅力を感じていた」<sup>7)</sup>と指摘し、さらに、彼の発見した「別のメキシコ」を次のように述べる。

トント川（農場のわきを流れる川）の畔に発見したその世界は、不正と貧困の世界であっただけでなく、美と情と力の世界でもあった<sup>8)</sup>。

「不正と貧困」のはびこる世界、しかしながら同時に「美と情と力」の息づく世界、ガミオがこうしたいわば当時のインディヘニスモ<sup>9)</sup>の常套手段ともいえるインディオ世界のとらえかたをしていたということはそのとおりであろう。彼は、インディオが「不正と貧困」のなかにもありながらも豊かな精神的世界を有しているとし、彼らのもっている「価値」を発見し、それを積極的に評価する。そして、こうしたインディオのおかれている状況や彼らのもっている「価値」が、メキシコのなかでもとりわけヨーロッパ人を祖先にもつ人々にまったく知られていないことを問題とした。つまり、ガミオは、白人世界とは違った「インディオ世界の発見」によって、その世界にかんする知識が欠如していることを痛感し、こうした無知がインディオ世界の「不正と貧困」の解消を遅らせ、メキシコの国民統合を妨げる大きな要因となっていると考えた。そこで、まずはじめにインディオを知るために、彼らの調査をすることからはじめる必要があった。ガミオが人類学研究に傾倒していったのは、こうした背景によるものである。

それぞれの言語、文化的表現、身体的特徴によってはっきりと規定され

特徴づけられるナショナリズムをもった（先住民）グループは、常にヨーロッパ起源のグループには知られてこなかったし、知られていない。

(…) この無知は、メキシコのナショナリティにとって許しがたい犯罪である。というのは、それらのグループの特徴や必要性を知らなければ、彼らの国民への接近や統合の努力は不可能となるからである<sup>10)</sup>。

ガミオは、インディオについての無知がもたらす弊害について、この他にもさまざまなところで繰り返し論じている。たとえば、1926年シカゴ大学でおこなわれた講演<sup>11)</sup>のなかでも次のように述べる。

（白人とインディオの接触を問題にして）しかしながら、このことは困難であります。なぜならば、一方また両方の肉体的、物質的、知的特徴がわからないとき、このことは、不幸にもメキシコの人々にとって真実であり、とくに大多数の先住民にかんして真実であります。そうしたとき二つの社会グループの関係を正常化することはできないからです<sup>12)</sup>。

ガミオは、“The Indian Basis of Mexican Civilization”というタイトルでこの講演をおこなったが、同じ講演会のなかで、“The Latin-American Basis of Mexican Civilization”と題して講演したホセ・バスコンセロスとは、両者の講演のタイトルが如実に物語っているように一見すると異なる立場にある。後者は、メキシコあるいはラテンアメリカの人種的、文化的起源を「スペイン＝ラテン」にもとめ、白人と有色人種の混血によってラテンアメリカにおいて新たな人種が誕生すると唱えた思想家である<sup>13)</sup>。彼は、インディオを「文明化」すべき「内なる野蛮」<sup>14)</sup>ととらえ、インディオを肯定的、積極的に評価しようといったガミオのような視点には乏しかった<sup>15)</sup>。そして、インディオ世界にかんする調査にも消極的であった。彼は、教育大臣在任中、ソーシャル・ワーカーが都市低所得者層や農村の調査を申し出たときのことをふりかえり、自叙伝に次のように記した。

インディオがどういう状態にあるかいうな。すでにわたしは知っている。肉体と魂の空腹。貧困地区の生活について語るな。閣議のなかに閉じこもって生きているのではない。貧しい人々を訪問しているのだ。わたし

には報告書は必要ない(…) <sup>16)</sup>。

ここでバスコンセロスが知っているというインディオは、幼少のころからメキシコ国内を転々とするなかで出会ったインディオであり、調査にもとづくものではなく体験的に知っているインディオであった。バスコンセロスにとってインディオは、植民地時代の宣教師による「文明化」の努力もむなしく、征服以前から「肉体と魂の空腹」のまま現在にいたっているのであり、そのことは調査をするまでもなくすでに明らかなこととされていた。いうまでもなくガミオは、バスコンセロスのようなインディオのとらえかたはしない。むしろ、ガミオの属する白人社会にとってインディオは、理解することが困難であるという。なぜならば、メキシコに住む白人はヨーロッパの価値基準を身につけているのであって、インディオとは異なる価値観をもつ白人はインディオを理解できないと考えたのである。

そこでガミオは、インディオを理解するために彼らを「科学的」に調査しなければならないと繰り返し主張する。しかも、その調査をおこなうのは、政治家や教育家、社会学者ではなく人類学者、とりわけ民族学者ということになる。さらに、人類学者、民族学者は、知識を蓄えるだけではなく、献身の気持ちをもち、そしてなによりも人種偏見をもたないことが条件となる<sup>17)</sup>。ガミオにとって「彼らインディオ」は他者でありながら、また同時に「われわれのインディオ」であって、そのインディオを理解するためには人種的な偏見を捨て「科学的に」調査しなければならないのであった。実際ガミオは、インディオが本質的に白人より劣るといった当時の人種論には与することなく、両者の人種的優劣はないと明言している。

インディオは、進歩にたいして白人と同様の能力をもっている。白人に優ることも劣ることもない<sup>18)</sup>。

これだけを見ると、ガミオは白人もインディオも平等であると述べているが、これに続く彼の指摘をみるとこの「平等」のもつ意味が特別なものとなってくる。

特定の歴史的祖先と、インディオの住む環境の非常に特殊な社会的、生物的、地理的などなどの条件によって、インディオはヨーロッパ起源の文化を受け入れ同化するためには不適格となってしまった。もし、(植民地期、独立期の)歴史的祖先の耐えがたい重石が消えたならば、(…)もし、今日のように彼らが白人よりも動物学的に劣るという考えをやめたならば、そして、食事、服装、教育、娯楽が向上するならば、インディオは、他のどの人種の人とも同じく現代の文化を受け入れるだろう<sup>19)</sup>。

ガミオによれば、インディオは人種的には白人と比べなら劣るところはないが、その歴史的な背景、社会的状況、あるいは気候や地形などの生活環境といった外的な条件によって、文化的、社会的に「遅れた」状態に追いやられたということになる。つまり、ガミオは、白人とインディオがすべての点において完全に平等であると主張しているわけではなかった。当時ラテンアメリカの知識人の思考のなかで支配的であった人種決定論を避けつつも、歴史、環境による決定論によってインディオの「遅れ」を説明しようとしたのである<sup>20)</sup>。すなわち、インディオは、300年にわたる植民地時代、および100年におよぶ独立時代をつうじて抑圧されてきたのであり、自然な進化の過程をたどることは不可能だった。また、メキシコは地形においても気候においても、あるいは言語においても多様性に富んでおり、それがメキシコの統一的な発展を妨げ、インディオの「ヨーロッパ起源の文化」への同化を遅らせてしまった。これが、ガミオの「平等」思想のうちに潜んでいる重要な点である。

ガミオは白人とインディオの人種的な「平等」を指摘しながらも、インディオを「遅れた」存在としてとらえることにはまったく躊躇しない。なぜならば、彼はヨーロッパ起源の白人文化のほうがインディオ文化よりも進んだ段階にあるという思考に強くとらわれていたからである。

(…)インディオは固有の文明をもっており、それはたとえどんなに魅力的であろうとも、その到達した発展段階がどんなに高くとも、現代の文明に比べて遅れている (…)<sup>21)</sup>。

(…) インディヘナの文明は、西洋文明と比べて遅れているうえに、体系化されず、学派も形成しなかった。(…) 反対に、ヨーロッパの文化は、より高度な発展段階を示しているうえに、秩序立って科学的に普及した (…)<sup>22)</sup>。

ただし、ガミオはここでも、人種と同様文化にも本質的な優劣を認めているのではなく、あくまでも歴史や環境に強く影響され、その結果として進化の段階に格差が生じるというように考えている。そして、こうした論法をもって、当時ヨーロッパや米国と比較して遅れているかにみえるメキシコではあっても、それはメキシコ人が本質的に劣っているのではないということを主張している。

要するに、教養ある国民とか教養のない国民とは呼ばないようにしよう。

(…) というのは、文化とは、何度も断言してきたように、人間の本質に固有な表現の総体を含意している。呼吸、栄養、再生産などなどは生理的表現、あるいは現象であり、認知、感情、記憶は、心理的表現である。しかし、メキシコ人の心理や生理が、他の国民のそれに劣っているとか優れているとは誰もいおうとは思わない。ましてや、心理や生理が欠けているとは思わない。そうであるならば、われわれを教養がないとか文化に欠けていると呼ぶことは、無邪気なことではないか<sup>23)</sup>。

インディオ世界の「遅れ」を、白人とインディオの人種や文化の本質的な優劣から説明するのではなく、その歴史、環境によって説明しようとするガミオにとっては、スペインという「異質」のものが入り込む以前のインディオは、その高度な文化ゆえに発展の可能性を秘めていたと思えた。しかしながら、白人支配による植民地期や独立期のなかで、インディオのその後の自然な発展が妨げられたため、彼らは「征服」以前の段階から進歩することができなかったというのである。いうまでもなく、「われわれのインディオの遅れ」はすなわちメキシコの「遅れ」である。そこでガミオは、「征服」以前のインディオに注目する。

現実的で、活気があり、独創的なインディヘナの伝統は、「征服」以前の

メキシコ人の生活がどのようなもので、どのように送られていたのかにわれわれの目を向けさせる。われわれの美的基準には、独創的で新奇的な芸術、多様な表現をもつ才気ある技巧、複雑で強力で賢い組織<sup>24)</sup>。

つまり、「征服」以前のインディオの世界を知ることができれば、彼らの「価値」を引き出すことができる。そして、その「価値」を生かしながら彼らの「遅れ」を取り戻すことによって、インディオのみならずメキシコ全体の発展が図られるとガミオは期待をかけたのであった。彼が人類学と考古学両方の研究を同時に進めたのはこうした考えにもとづいたものであった。

## 2. インディオを知る

ガミオは、メキシコの少数派である白人が、多数派であるインディオの「実態」を知らないために彼らの生活を向上させることができないと指摘し、インディオを知るためには人類学的な基準によって彼らを調査する必要があると述べた。その際に、調査の対象となるのは実際に生きているインディオの社会だけではなく、「征服」以前のインディオまでさかのぼって調査すべきであると主張する。

先住民族を、その体型、文明、言語において知るための唯一の方法は、人類学的基準をもって、彼らの前植民地期および植民地期の祖先と現代の特徴を調査することである<sup>25)</sup>。

ガミオにとって考古学は、過去のものの科学でなく人間を扱う科学であり、人類学の不可欠な一部である。そして、メキシコにおける考古学は、「征服」以前のインディオの文化、文明を研究することであった。植民地期、独立期をつうじての抑圧によって進歩することがなくそれ以前と同様の状態で生きていると考えられるインディオであれば、「征服」以前の彼らを考古学的な手法で研究することは、過去を扱いながらも現在を扱うことになる。ガミオが、テオティワカンの発掘調査とともに、サン・フアン・テオティワカンという村の調査に入ったのもこうした理由によるものであ



ろう。

こうしてインディオについて知る唯一の手段としてガミオが採用した方法が、考古学を含んだ人類学であった。彼が繰り返し繰り返し「科学」ということばをさまざまところで用いているように、その人類学は、「科学」に裏打ちされたものでなければならない。いうまでもなく、ここでいう「科学」とは、西欧で生み出された知の一形態であるが、ガミオは、この「科学」によって、さらには西欧との対比によってインディオを調査、分類しようとする。

たとえば、インディオあるいはインディオの血が濃いグループと白人あるいは白人の血が濃いグループとにメキシコ人を分類し、両者の労働力の違いを分析することによってその身体的な特徴を明らかにしようと試みる。それによると、前者はエネルギーを生み出す能力、あるいは筋肉の発達において後者よりも劣る反面、忍耐力、持続力に勝る。

前者のグループ（インディオ）は、エネルギーと力を生み出すことが遅いかあるいは、半分であるが、力の継続、持続、耐久という点においては、後者のグループ（白人）をしのぐ。外見上、その筋肉の発達は後者のそれに劣る<sup>26)</sup>。

さらにこうした違いは、インディオのグループが菜食中心の粗食であるのにたいし、白人はさまざまなものを豊富に食すことから生じるといった食生活の相違にその原因を求める。ただし、これはデータや前例が少ないため必ずしも科学的ではないが、経験的に理解できるとしている。

あれほど「科学」にこだわるガミオが、こうした「人種」による相違という重大な問題にたいして、あまりにも安易に結論を導き出している。しかも、インディオがエネルギーを生み出す力が弱い反面、忍耐力、持続力に勝るという指摘は、インディオの「怠惰」、「無気力」、「忍耐力」、「持続力」といった「征服」以後から非インディオ社会のなかで論じられてきた紋切り型のインディオのイメージと重なる<sup>27)</sup>。ガミオはここで、「科学的」なデータ不足という点を留保してはいるものの、「科学」を重視する彼であ

れば、この人種による労働力の相違も「科学的」に証明されると信じていたと考えるべきであろう。こうして、ガミオの意図はどうであれ、インディオのステレオタイプが「科学」によって裏づけられるということになるだろう。

また、ガミオは、「征服」以前のインディオの芸術作品の評価にかんしても、とりあえずはすでに身につけている西洋の基準から判断せざるをえないと主張する。

われわれは準備ができています。われわれの魂は、いかなる時も古代ギリシャ、古代ローマ、ビザンチンでありうる。われわれの芸術的感情は、常に当時の人々、当該の国々の音域と同様にひびくだろう。ローマ人、ギリシャ人、ビザンチン人にかんして表明されたことは、西洋芸術に近い、あるいは遠い直系の他の民族に援用されなければならない。すなわち、エジプト、カルデア、アッシリア、フェニキア、ユダヤ、アラビア、インド、ペルシャ、小アジアである<sup>28)</sup>。

歴史や文学、博物館やその他の教育施設によって、西洋芸術にたいする知識や感性を身につけているガミオら白人は、ヨーロッパだけではなく、エジプトやインドなど非ヨーロッパ地域の芸術までもその古代にさかのぼって理解し共感できるというガミオであるが、自分の身近にいるインディオの数百年ほど前の芸術が理解できないという。なぜならば、そうした芸術作品ははじめてみるものであって、それを判断する基準をもたないからであった。そこで、発掘によって発見された出土品や「征服」以前の建築物に残る紋様などを、古代ギリシャやフェニキア、エジプトなどのものと並べ、形態の類似しているものをとりあえず芸術作品とみなす。ただし、それはあくまでも形態上の類似によるものであって、作品がつくりだされた背景やそれに込められている意味まではわからない。そこで、ガミオのいうところの人類学的な研究によってそうした背景や意味を明らかにする必要性が説かれるが、しかしここでもまた、身体的な特徴と同様ヨーロッパとの比較においてインディオの芸術が分類されていることに留意する必

要があるだろう。

ガミオは、インディオの肉体的特徴から芸術作品にいたるさまざまな観点からインディオを知ろうとする。こうした彼の姿勢は、知ることによってインディオのおかれている「貧困と不正」の解消をめざすという思いに根ざしたものである。しかしながら、彼のインディオ言語にたいする考えをみるならば、考古学を含んだ人類学的調査によってインディオを知ることには大きな問題がはらまれていることに気づく。

ガミオはインディオの言語にかんしても、それを研究する科学的基準が欠如していることを指摘し、彼らの言語を理解することの必要性を説く。なぜならば、言語は、「インディオの魂に通じる唯一の道」であり、彼らのイデオロギーや物質文化を表現しているからであるという。20世紀のはじめは、教育においてインディオの言語を無視した一方的なスペイン語化政策が中心であったことなどを考えると<sup>29)</sup>、このガミオの指摘は、それに反してインディオの固有の文化を擁護しているようにもみえる。しかしながら、この指摘の前提としてガミオは次のように論じている。

メキシコの土着の言語や方言は、幾分急速に消えつつあり、自然の消滅へといたるだろうとセンサスは示しています。したがって、われわれは、こうした衰退を妨げるようなたわいもない目的をもって、それらの言語を広範にそして熱心に調査することはありません。その衰退は、国家の統一には有益なのです<sup>30)</sup>。

ガミオにとってインディオの言語は、あくまでも彼らを知るための手段にすぎないのであって、彼らの調査が終わればその言語は不要であるどころか統一のための障害となる。つまり、ガミオがインディオ世界について知らなければならないというとき、もちろんそれは、インディオの権利を尊重すべきとしながらも、インディオの「価値」の復権や擁護が最終的な目的とされるのではなく、彼らの「価値」を生かしながらも、あくまでも、白人社会へのインディオの「統合 (incorporación)」、あるいは、白人との「融合 (fusión)」を目的としていたのである。

「半文明化された」ヤキ族について、彼らの土地を保証すると同時に) 数世紀前から侵略者である人種の構成員の発達だけがおこなわれてきた有利な条件のなかで、彼ら(ヤキ族)の身体的、経済的、知的発展が遂行されるようにつとめなければならない。そのことは、もちろん彼らのオリジナルな文化が、他の文化的観念の残酷な押しつけによって抹殺されることを意味するのではない。(…)反対に、今日まで支配してきた人種の表現と彼らの純粋な表現との、人工的ではない発展的な融合に慎重に協力し、彼らの純粋な表現の自発的な発展に便宜を図るべきである<sup>31)</sup>。インディオの統合は、彼らの自然な発展を促すことによって達成されなければならないのであって、強制的な西欧文明の押しつけであってはならない。そこでガミオは、一方的にインディオを自分たちに近づけるのではなく、反対に自分たちが彼らに近づこうと提案する。

インディオを統合するためには、突然《彼らをヨーロッパ化》するのではない。反対に、すでに彼らの文明によって希釈されて、エキゾティックでも、残酷でも、苦々しくも、理解不可能でもないわれわれの文明を彼らに提示するために、われわれがいくらか《インディオ化》しよう。もちろん、インディオへ近づくことが、極端なおろかさへと誇張されるべきではない<sup>32)</sup>。

この引用からもわかるように、ガミオら白人は常に、インディオにはたらきかける主体としてたちあらわれ、一方インディオは常に客体として扱われる。客体であるインディオは、白人世界へ接近する道を余儀なくされ、それを受け入れるか拒否するかといった彼らの選択ははじめから想定されてはいない。そして、主体である白人は、完全に「インディオ化」されることのないように留意しつつ、自らが進んでインディオに近づいていくことによって、インディオの特徴や必要性を知り、彼らを自分たちの「進んだ」世界に引き上げようとしたのである。

混血化(mastizaje)はメキシコに有益であるということを考慮しなければならない。単に民族の視点からだけではなく、とくに、今日住民の大

部分が呈している不満足な状況より進歩した文化様式を確立することが可能となるために。たとえ、それが、教育やその他の手段を利用して達成されるとしても、こうした作業は、混血化が強化されればよりはやく遂行されるだろう。なぜなら、混血化は、土着の遅れた文化的特質の消滅あるいは代替の結果として、それ自体自動的に効果的な文化の進歩をもたらすからである<sup>33)</sup>。

メキシコ全体の発展のためには、「人種の融合、文化的表現の収斂と融合、言語的統一、経済的均衡」<sup>34)</sup>による「正統な」メキシコ文化を生みだし、ナショナルアイデンティティを確固たるものにしなければならない。その目的にむけて、インディオは、ヨーロッパの基準によって調査、研究、分析によって理解される対象と化す。ガミオは、そうした理解にもとづいて、インディオの「遅れた」部分をインディオと白人との「混血」、「融合」によって取り除くことが可能であると考えたのである。

### 3. インディオの救済／メキシコの救済

ガミオが、「貧困と不正」の是正をめざしておこなった人類学的研究の根底には、これまで述べてきたように、インディオを調査、分析によって理解可能な対象ととらえる視線があった。そして、そうした調査は、白人にとって有利になるばかりではなくインディオの利益も考慮しなければならず、そのためには、「軍人や商人ではなく、地域の言語を知り、先住民のメンタリティーを調査する適性のある専門家」に任せるべきであるとする<sup>35)</sup>。つまりは、インディオを理解できるのは、ガミオら白人の人類学者であり、そして、政治的、経済的な利害関係のない人類学者こそインディオの利益を代弁する義務が課せられているというのである。その根底には、インディオが直接声を発することはないという考えが流れている。なぜならば、彼らは「文化的劣等」におしこめられていたがゆえに声を上げることはできないとされていたからであった。

(革命がインディオからおこらなかった) その説明は非常にはっきりと

している。インディオは、常に苦しむよう運命づけられてきたが、また、常に、命をかけて屈辱、略奪、侮辱の復讐をしようとしていた。しかし、不幸にも解放にいたるための適切な手段を知らなかった。指導的才能が欠如しており、その才能は、科学的知識と文化的表現の適切な方向づけをもつことでのみえられるのである<sup>36)</sup>。

さらに、インディオは自らを解放する能力に欠けているがために、人類学者によって自分たちの声を表明してもらう権利を有するという。

インディオには、その文化的劣等性のため、彼ら固有の思考様式を白人に理解してもらうことを期待する権利があります。なぜならば、少数の白人の近代文明を特徴づける難しいイデオロギ的、物質的メカニズムの段階に、精神的に、急速に、奇跡的に到達することを期待することはできないからです<sup>37)</sup>。

こうした一連のガミオの言説には、インディオが「貧困と不正」の状況にあるばかりでなく、「文化的、知的遅れ」の状態に放置されてきたということが繰り返しあらわれる。そうしたインディオ理解は、人類学という「科学」によって導き出されている。しかしながら、これでは、バスコンセロスがインディオを調査することなく決めつけた「肉体と魂の空腹」の状態と同じではないか。もちろんこのことは単なる偶然ではなく、ガミオやバスコンセロスら当時の知識人のあいだに、インディオは「肉体と魂の空腹」の状態にあるという前提がすでにあったということを示しているのではないだろうか。

バスコンセロスをはじめ多くの知識人がメキシコあるいはラテンアメリカのアイデンティティを模索したこの時代に、ガミオもまた、19世紀のメキシコの芸術家や知識人がヨーロッパの模倣に終始したことを非難し、メキシコの真のナショナルアイデンティティを構築するべきであると強調する。こうしたなかで、テオティワカンのピラミッドの復元にもみられるように、ガミオは、インディオの「実態」を明らかにするというよりもむしろ、声なきインディオの世界を、ナショナルアイデンティティを構成する

不可欠の要素として発見し、理解し、あるいは発明、生産していったといえるのではないか<sup>38)</sup>。

いうまでもなく、さまざまな地域に多様な先住民集団が存在し、それらをすべて「インディオ」としてあたかも実体のある集団のごとくに論じることはできない。ガミオもそれを否定はしないが、常にヨーロッパ起源の「白人」と「土着」のインディオという二項対立的な思考様式のなかで、インディオをヨーロッパの基準から「野生のインディオ」、「半文明化されたインディオ」などに分類し、それに「マヤ族」、「ヤキ族」などをあてはめていく。そして、それぞれの身体的、言語的特徴、さらには精神的特徴までも「科学」によって明らかにするという。そしてその結果は、次のようなものであった。

インディオの宗教的信条、芸術的傾向、産業活動、習慣、倫理的様相を調査し、それらを民族学的基準で実験的体系的に検討してみると、インディオはいきいきとした精神的態度を保持しているが、400年遅れて生きている。彼らの知的表現は、先スペイン期に発展し、状況と環境によって変革されただけの知的表現を継続したものにすぎない<sup>39)</sup>。

考古学的、人類学的、民族学的研究によって明らかになったとされることは、インディオは「精神的」にはいきいきとした態度を保持しているということ、そして、知的、文化的には400年遅れて生きているということであった。知的、文化的に白人に劣るインディオは、革命を導くこともできず、「苦しむことを運命づけられ」白人から手をさしのべられるのを待つ受け身の存在として規定された。そして、主体性がはじめから想定されていないインディオは自ら声を上げることもなく、彼らにとっての利益や必要性は白人の人類学者の調査によって決定され代弁されて、それにもとづく政策がつくられていく。換言するならば、人類学者がインディオにかんする知識を蓄えることは、受け身の存在とされる彼らを支配し統治することに他ならないのではないか<sup>40)</sup>。ガミオ自身も、そのことを十分に自覚していた。

論理的で、権威ある基盤のうえに統治することを可能とするためには、あらかじめ統治しようとする住民の祖先、性質、機能を知ることが不可欠である。残念ながらわれわれには、そうした知識がまだ不十分であり、表面的である(…) <sup>41)</sup>。

繰り返し述べるように、ガミオは、インディオのおかれてる「貧困と不正」の状態の是正、つまりは400年もの長いあいだ続いた抑圧からの解放のために彼らを知ろうというのであった。しかし、人種や文化には本質的な優劣の差がないと述べながらも、歴史や環境にもとづく決定論によってインディオが知的、文化的に劣等であるとし、だからこそ彼らの救済が必要であり、可能であるという。ところがその救済の手は、インディオがメキシコの一員となろうとしたときに限り差し出される。それゆえに、たとえば統一の障害となるインディオの各言語は、消滅することが望まれている。

ガミオにとって、「われわれのインディオ」を排除してのメキシコの統一はありえず、しかしながら白人が「インディオ化」することによっての統一も決してありえない。つまり、インディオを白人世界に融合することによって救済することのみがメキシコのアイデンティティをつくりあげ、そしてメキシコの発展を保障する唯一の道なのである。いいかえるならば、インディオの救済は、逆にガミオらメキシコの白人にとっての救済となっていたのである <sup>42)</sup>。

## むすびにかえて

本論は、ガミオが、ヨーロッパ中心主義、あるいは白人中心主義的な認識枠組みを問い直すことなく、声をあげることのない受け身の「インディオ」と彼らに手をさしのべるべき「白人」という二項対立的な構図をもちながら、白人社会では知られていないとするインディオ世界を「科学的に」調査しつくりあげることで、それをメキシコのアイデンティティに取り込もうとしたことを明らかにした。とはいえ、彼がインディオの国民文化への一方的な統合を目指しただけであるとか、インディオにたいする偏見に



とらわれていたため、インディオ世界の「本質」をとらえることができなかったとして彼の思想を非難することが本論の目的ではない。ガミオは、1940年の第一回米州インディヘニスタ会議の開催に中心的な役割を果たし、その後も米州インディヘニスタ研究所 (Instituto Indigenista Interamericano) の所長をつとめ、さまざまな国際会議に出席するなど、積極的に先住民問題に関与してきたことを考えると、彼のもつこうした認識様式が広く共有されていたということは想像に難くない。それゆえに、この問題をガミオ一個人の思想の問題とするのではなく、より広く当時の文脈のなかで問い直さなければならない。

現在、メキシコにおいてもガミオの人類学は必ずしも受け入れられているわけではなく、また、人種による区別はこれまでさまざまな角度から批判されている。しかしながら、コロンブスの「発見500年記念」の際に掲げられたスローガン「二つの世界の出会い」に象徴されるように、「ヨーロッパ」と「アメリカ」、「白人」と「インディオ」などといった二項対立的な認識枠組み、人種による区別、差別はいまなお根強く残っている<sup>43)</sup>。また、20世紀の前半のメキシコにおいてガミオやバスコンセロスらがつくりあげていった「メキシコ文化＝混血文化」といった言説が、われわれのメキシコ理解のあり方ある程度規定してきたことを考えるならば、ガミオの思想がもつ問題は現代のわれわれがかかえる問題とも無関係ではないはずである。ガミオに限らずこの時代に生きた知識人がどのような認識様式をもって、こうした問題にとりくんだのかを明らかにしていくことが今後も課題となるだろう。

## 註

- 1) たとえば、Castillo, Isidro, *Indigenistas de México*, México, SEP, 1968, p135。
- 2) ガミオが、先住民を「インディオ」と認識していたことを考え、あえてこのことばを使用する。

- 3) Anderson, Benedict, *Imagined Communities: Refleltions on the Origin and Spread of Nationalism*, London, Verso, 1983 (白石隆他訳『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』東京, リプロポート, 1987). なお, Hobsbawm, Eric & Terence Rangereds., *The Invention of Tradition*, Cambridge, The Press of the Univ. of Cambridge, 1983 (前川啓治他訳『創られた伝統』東京, 紀伊國屋書店, 1992) などにも示唆をえた。
- 4) たとえば, コロンブスの「発見500年記念」の一連の行事にたいして清水は, 「現代に生きるインディオ文明とは関係なく, あくまでも遺跡として残る死せるインディオ文明」を利用しつつ, 自己の社会的, 政治的正統性を主張する一部の支配的エリートのある方を批判している(清水透「コロンブスと近代」歴史学研究会編『講座世界史1 世界史とは何か—多元的世界の接触の転機』東京, 東京大学出版会, 1995, pp.175-179)。また, ボンフィル・バターヤは, ラテンアメリカにおけるインディヘニスモ政策を振り返り, 「インディオの文化の『肯定的な価値』を保護しようという意図が明言されている政府あるいは国際的な声明があるにしても, 実際のところ, インディヘニスタの実践は, インディオの文化固有の中身を支配的な国民文化のそれにとりかえることによってエスニックの文化的差異を消し去ろうとした」と指摘する(Bonfil Batalla, Guillermo, *Identidad y pluralismo cultural en América Latina*, Buenos Aires, Fondo Editorial del CEHASS/ Editorial de la Univ. de Puerto Rico, 1992, p197)。
- 5) たとえば, 高山智博「メキシコ文化の形成—混血の論理」『思想』東京, 岩波書店, 1973, 6月号, pp.63-75, 大貫良夫「メスティソの誕生」大貫良夫編『民族交錯のアメリカ大陸』東京, 山川出版社, 1984, pp.305-330, 黒田悦子「メスティソ化と先住民社会—メキシコの場合」黒田悦子編『民族の出会うかたち』東京, 朝日選書, 1994, pp.39-60など。
- 6) 落合は, 「正確な文化的実体」の把握のみをめざす地域文化研究をとじられたものであると断じ, 「偏見や誤解やステレオタイプと呼ばれるものも文化をめぐる表現や理解の一形態と意識的に捕捉し, 積極的に研究対象とすること

が望まれる」と述べる（落合一泰『『アメリカ』の発明—ヨーロッパにおけるその視覚イメージをめぐる—』日本ラテンアメリカ学会『ラテンアメリカ研究年報』No.13, 1993）。本論ではこれに示唆をえて、ガミオのインディオのとらえ方を偏見あるいは誤解として批判するのではなく、ガミオがインディオをどのようにとらえ、そして表現していたかに注目したい。

- 7) González Gamio, Angeles, *Manuel Gamio: una lucha sin final*, México, UNAM, 1987, p.21. なお、括弧内は引用者による註、または省略である。以下同様。
- 8) *Ibid.*, p.22.
- 9) メキシコのインディヘニスモにかんしては、20世紀前半、とりわけカルデナス政権時代（1934-1940）にさかんになった対先住民政策を官製インディヘニスモとして、それを先住民の一方的な同化として否定的にとらえる見方がある（たとえば、飯島みどり『『国家』に変容を迫るインディオたち』歴史学研究会編『南北アメリカの500年第5巻 統合と自立』東京、青木書店、1993, p.219）。ガミオは、対先住民政策にかかわる研究や行政職に従事し、この官製インディヘニスモの一翼を担ったといえるが、しかしながら、小論ではガミオの思想を官製インディヘニスモとして否定的にとらえるのではなく、彼の思想の検討をつうじてメキシコのインディヘニスモという潮流にはらむ問題を問い直すという視点に立ちたい。
- 10) Gamio, Manuel, *Forjando patria: pro nacionalismo*, México, Librería de Porrúa Hermanos, 1916, p.17.
- 11) シカゴ大学でおこなわれたハリス・ファンデーションによるこの講演会には、ガミオ、バスコンセロス、モイセス・サエンス（Moisés Sáenz）、およびカリフォルニア大学からハーバート・I・プリーストリ（Herbert I. Priestley）が招かれた。ガミオとバスコンセロスの講演は、*Aspects of Mexican Civilization*, Chicago, The Univ. of Chicago Press, 1926に、サエンスとプリーストリの講演は、*Some Mexican Problems*, Chicago, The Univ. of Chicago Press, 1926にそれぞれ取められた。ガミオ、バスコンセロス、サエンスはとくに1920

- 年代以降、教育を中心にメキシコの対先住民政策に深く関与した人物であり、彼らにかんする研究は当時のメキシコのナショナリズムを検討するうえでも非常に興味深いのが、それにかんしては別の機会にゆずりたい。
- 12) Vasconcelos, José/ Manuel Gamio, *Aspects of Mexican Civilization*, Chicago, The Univ. of Chicago Press, 1926, pp.122-123. 同様の主張は、同 p.10, p.16, p.129, Gamio, Manuel, *Hacia un nuevo México: problemas sociales*, México, 1935, p.6 などにもみられる。
- 13) バスコンセロスの思想にかんしては、拙稿「メキシコにおける『混血』イメージ—ホセ・バスコンセロスの『混血』思想の形成過程」上智大学イベロアメリカ研究所『イベロアメリカ研究』第XVI巻第2号, 1995, pp.61-74を参照されたい。
- 14) Vasconcelos, José, *Ulises criollo: la vida del autor escrita por él mismo*, México, Ediciones Botas (3<sup>a</sup> ed.), p.346.
- 15) ゴンサーレス・ガミオによると、ガミオとバスコンセロスのあいだには、インディオにたいする見解の相違から激しい議論がかわされた(González Gamio, *op. cit.*, p.124)。
- 16) Vasconcelos, José, *El desastre: tercera parte de Ulises criollo*, México, Ediciones Botas, 1951, p68, (1<sup>a</sup> ed. 1938).
- 17) Gamio, *Forjando patria*, p.40.
- 18) *Ibid.*, p. 38.
- 19) *Ibid.*, pp.38-39.
- 20) 柳原は、今世紀初頭のラテンアメリカ知識人のあいだで支配的であった人種、歴史、環境などによる決定論が、フランスを中心としたヨーロッパの思考形態であるとし、サムエル・ラモス (Samuel Ramos 1897-1959) を例にメキシコでこうした思考がいかに根強かったかを指摘している。さらに、こうした人種論、決定論をアルフォンソ・レイエスが批判していたことに注目する。(柳原孝敦「メキシコのウェルギリウス／ウェルギリウスのメキシコ—アルフォンソ・レイエスの文化論」上智大学イベロアメリカ研究所『イベロア

メリカ研究』第XVI巻第2号, 1995, pp.50-51)。

- 21) Gamio, *Forjando patria*, p.172.
- 22) *Ibid.*, p.174.
- 23) *Ibid.*, p.189.
- 24) *Ibid.*, p.116.
- 25) *Ibid.*, p.24.
- 26) *Ibid.*, p.249.
- 27) ガミオは、こうしたステレオタイプともいえるインディオのとらえ方をし  
て、「(インディオは他のどの人種とも比肩しうる知的態度を有するとしたう  
えで)反対に、インディオは臆病で、エネルギーと熱望に欠け、<理性の人>  
白人の侮辱と嘲笑を常に恐れている」と述べる (*Ibid.*, p.32)。
- 28) *Ibid.*, p.73.
- 29) 当時の言語教育政策については、小林致広「メヒコのインディヘニスモと  
言語政策(その1, 2)」『神戸外大論叢』33:5, 34:1, 1982, 1983, Ruiz, Ramón  
Eduardo, *Mexico: The Challenge of Poverty and Illiteracy*, San Marino,  
Henry E. Huntington Library, 1963 (María Elena Hope trad.) *México 1920  
-1958: el reto de la pobreza y del analfabetismo*, México, F.C.E., 1977 な  
どがある。
- 30) Gamio, *Aspects of Mexican Civilization*, p.126.
- 31) Gamio, *Forjando patria*, pp.313-314.
- 32) *Ibid.*, p.172
- 33) Gamio, *Hacia un nuevo México*, p.27.ガミオの混血にたいする考えは、「ス  
페인=ラテン」をラテンアメリカのアイデンティティの基盤ととらえるパ  
スコンセロスの混血思想にきわめて近いものとなっている。
- 34) ガミオは、『祖国をつくる (*Forjando patria*)』のコンセプトを要約すると  
これらの点にあるとして、この著作を締めくくる (Gamio, *Forjando patria*,  
p.325)。
- 35) *Ibid.*, pp.310-311.

- 36) *Ibid.*, pp.168-169.
- 37) Gamio, *Aspects of Mexican Civilization*, p.126.
- 38) R. ペレス・モンフォルトは、インディオのステレオタイプが、1920年から1940年というメキシコのナショナリズムの高揚期に、とくにポピュラーカルチャーのなかでどのようにつくられてきたのかを論じている。Pérez Montfort, Ricardo, "Indigenismo, hispanismo y panamericanismo en la cultura popular mexicana de 1920 a 1940", Blancarte, Roberto (comp.), *Cultura e identidad nacional*, México, F.C.E., 1994.
- 39) Gamio, *Forjando patria*, p.170.
- 40) エドワード・サイードは、『オリエンタリズム』のなかで、知識をもつということがその対象となったものを支配することであると論じている。たとえば, Said, Edward, *Orientalism*, Vintage Books, New York, 1994 (1st. ed. 1978), p.32 (板垣雄三／杉田英明監修, 今沢紀子訳『オリエンタリズム』東京, 平凡社, 1986, p.32)。
- 41) Gamio, *Hacia un nuevo México*, p6.
- 42) 大橋は、サイードの「オリエンタリズム」にかんする論考のなかで、「オリエンタリズム」のディスクールを「認知し研究しつつ (知のディスクール), それによって抑圧の準備をするもの (権力のディスクール)」であるとし、それは、オリエントを過去の栄光へ、あるいはアジア的専制から解放するレトリックであると同時に、疲弊し頹廃した西欧を救済する鍵をオリエントに求めるレトリックでもであると指摘する (大橋洋一「マッピング・サイドーその方法と批評」『現代思想』Vol.23-03, 東京, 青土社, 1995, 3月号, p. 137)。
- 43) 辻内は、「人種」という言説からの脱却を模索する論文において、「自己と他者, 白人と黒人, 合理と非合理, キリスト教と異教, 啓蒙と野蛮, ヨーロッパとアフリカなどの二項対立がコロニアルの言説である」とし、「多文化主義もしくは文化をめぐる論争を, かりにも宗教や人種または民族という記号化された『主体』間の対立として理解することがあるとすれば, それは他で

もなくコロニアルな関係を再生産することを意味する」と指摘する。そして、エセンシャルイズム、ポストコロニアルの思潮を検討しつつ、こうした思潮が机上の空論に終わることなくいかにリアリティを確保できるかが問題であるとしながら、「人種」という言説からの出口はまだみえないと結論づけている（辻内鏡人「脱『人種』言説のアポリア—エセンシャルイズムとポストコロニアルの相克」『思想』東京、岩波書店、1995、8月号、pp.63-81）。

※本論文は、平成7年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の援助による研究成果の一部である。